

<서울시자원봉사센터 일본어 번역 자료>

2. 「市民社会」(Civil Society)の視点から考察するボランティア論の展開

拙者自身も、大学において「ボランティア論」等の関連科目を教える立場である。そこで、拙者がボランティアについて論じる場合、とくに歴史的考察を試みるにあたっての視点がどのように定めているのかが重要であると考え。第1の視点として、私はボランティアについて考察するとき、市民社会(Civil Society)の視点から論じることである。「市民社会」(Civil Society)という言葉は、英国の社会では、最近までアカデミックな議論の場でしか登場しない特殊な用語だった。その正確な定義についても、政治的・哲学的な観点から長年議論されてきた経緯があり、理念は時代とともに変化し、現在でも多様な定義づけがなされている。

しかしながら、めまぐるしい社会変動のなかで「市民社会」という言葉は、多様な概念の定義を認めつつ、現実の社会の要請のなかで、「行政」(Public Sector)や「企業セクター」(Private Sector)と、そのどちらにも属さず、行動原理を異にする「ボランタリーセクター」(Voluntary Sector)として、いまではよく使われるようになってきている。

『オックスフォード政治学小辞典』によれば、「市民社会」とは「国家と家族の間にある、さまざまな中間的な集団」と説明している。

ヨーロッパにおいては、「市民」(Citizen)と もともと特別な権利を国家からあたえられた住民をさす言葉であった。「市民」の概念は、古代 リシャの都市国家の成立までさかのぼるが、ギリシャでは、紀元前8世紀頃に「ポリス」と呼ばれる都市国家が誕生していた。その都市国家は、「前古典期」と呼ばれる時代を経過した後に、紀6世紀から紀元前4世紀にかけての「古典期」と呼ばれる時代に完成したといわれている。「ポリス」とは、市民による共同防衛体の意味